
遊戯王 - 異世界黙示録一

ぽいにん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 - 異世界黙示録Ⅰ

【Nコード】

N0377L

【作者名】

ぼいにん

【あらすじ】

いきなり現れた謎の裂け目に吸い込まれた「海瀬総一」かいせそういち。そして、
彼が辿り着いた場所とは……

魔法族の里（前書き）

え、前回で宣言した通り、今回もデュエルシーンはありません。

（汗）

今回は作品の概要をちょっとだけ説明をば。

魔法族の里

「うえあつ!?!」

不本意ながらも再び情けない悲鳴を上げ、途中で粗いクッションのような感覚を味わい、オレの体が地面へと叩きつけられた。あ、ちよつと尾てい骨痛めたかも。

尻部の痛みに耐えながらも何とか立ち上がる。よしよし、軽い鈍痛だけで済んでるっばい。無事で何より。

上を見上げて納得した。見上げれば何とまあ、落下したオレがブチ抜いたであろう大きな穴が、藁葺きの屋根に穿たれていた。うん、屋根の穴からあの変な紫色の裂け目が見えるし……ん、屋根？

まさかと思い、周囲をぐるりと見渡してみる。年季の入った内装に、その雰囲気とマッチした古風な食器棚や椅子など、生活の痕跡と匂いが染み込んでいる。家の骨組みを構成していたであろう、散乱した木材はとりあえず無視。

「……とうとう来おったな。」

オレのではない、明らかに噎れた声の呟き。再び室内を見渡してみ
る。

すると、部屋の奥の暗がり隠れて、背筋が曲がり、震える手で杖
を突いた婆さんが立っていた。多分、この家主なんだろうな。い
や、冷静に分析している場合ではない。

「……あゝ、スマン。天井、つーか屋根？に風穴ブチ開けたのは謝
る。ただまあオレも決して怪しいヤツでは……。」

「「イモータル」めつつつ!!」

「……は？」

おいおい。初対面の人間に対していきなり何を言い出すんだこの婆
さんは。コラゝ、とか、コノワルガキガゝ、とか、もっと他に言う
べき事が有るだろう。てかなに、「イモータル」？なにそれおいし
いの？何とも形容しがたい表情で叫ぶもんだから、こっちは呆気に
取られるしか無いじゃないか。

「《マジカル・エクスプロージョン》っ!!」

「やっぱりかああああああっ!?!」

婆さんが叫んだと同時に、その杖先から稲光が進り、視界一面を白に染め上げられ……、大爆発が起きた。

ハズだった。

「……ん?」

いつまで経っても、爆発も閃光も進らない。何かと老婆を見やる。先ほどもまでの光り具合はどこへやら。老婆の杖先は固まり、そこに埋め込まれた宝玉は輝きを失っていた。

流石のオレも些か不穏な空気を感じずにはいられない。なにしろ老婆は直立したまま凍ったように静止して、その表情は驚愕に染まり、瞼は見開かれているのだ。正直、不気味すぎる。

ふと、その視線がオレの左腕に向けられている事に気付き、オレも一緒に見やってみる。

「……なんだこりゃ。」

……なんとまあ。デュエルディスクが装着されているじゃないか。しかもアニメとかでも見たこと無いような代物だった。

見た目的にはGX世代のヤツだが、全体的なカラーは珍しい褐色に沈んでいる。ここまでは良い。問題は、腕部、つまりライフポイントのカウンターとかが有る所が異質だった。

回転式拳銃の弾倉のようなモノが埋め込まれているのだ。そこだけがどうにも生々しい。生々しすぎて全体的なデザインとのミスマッチが甚だしい。

……理解が追い付かん。答えを求めるように、未だ杖を構えて立ち

尽くす老婆を見やるが、相変わらずビデオの一時停止みたいに硬直したままだ。そろそろ動けよ。

とゆうか、不可解な出来事の連続にパニックを起こした脳みそが付いていけて無いらるか。やけに冷静にいられる自分が怖い。現に今ほつぺを抓ってみる。うん、痛い。ツイストしたから特に。てか、このベタなネタを最初に考えた人ってスゲーよね。

閑話休題。……沈黙が痛い。なんとなく居心地が悪くなってきた。どうにも沈黙は苦手なので、たまらず口を開いてみる。

「……………え〜っと？大丈夫で、ごさいますよーか？」

「……………勇者さま。」

「……………は？」

あれ、デジャヴユ？婆さんがいきなり意味不明な単語を呟いたから、オレが思わず間抜けに声を上げる。しかし相変わらずヴユの発音が難しい。

「勇者さまあああつ！！」

「はあ！？」

老婆の凄まじい形相、リターンズ。だが今度は、叫ぶと地面におでこを擦りつけんほどの土下座を繰り返しやがった。

おいおい、何なんだいったい……。

「私は《執念深き老魔術師》じゃ。ここ《魔法族の里》の長老でもある。」

「ああ……、やっぱ？」

「？」

あの後、どーにか頭を上げてもらって、ようやく婆さん、もとい《執念深き老魔術師》も自己紹介ができるくらいに落ち着いてきた。

てゆうかホントに似てるなオイ。コスプレ大会とか出たら優勝しそ
うだな。まあ、本人そのもの……らしいし、当たり前といえば当た
り前か。でも誰も興味無さそうだな。

さてはて、オレはナニのドコから問い詰めればいいのかね。……よ
し、折角の「遊戯王」だし、チェーン処理みたく逆順処理を試してみ
よう。

「えーっと、先ず一つ目の質問。

……勇者さまとか言ってたけど、何それ。」

“勇者”という単語に反応して、《執念深き老魔術師》は再び土下

座をしそうになったもんだから、慌てて右手で制した。まったく、この応酬だと話が進まん。

体裁を取り繕うようにゴホンと咳払いを軽く吐いて、《執念深き老魔術師》は口を開く。昔のRPGだと、こういつ長老だか王様だかが「魔王を倒すのじゃ！」てな感じで、色々教えてくるんだよね。

「う、うむ。勇者さまはな、今から20年ほど前に、突然この世界に現れた1人の男の事のお。」

「20年前？伝説の類にしちゃあ、それほど古くない話だな。」

「その男は、おぬしのように《次元の裂け目》を通ってこの世界にやってきての。」

「《次元の裂け目》？」

ああ、あれか。もう一度、頭上の屋根に開いた穴を見上げてみる。その上には、もう紫色の空間は無くなっていた。あらま。

てゆーか《次元の裂け目》ってアレだよな？【剣闘獣】とかにたま

ーに入ってる永続魔法の。アレには昔のオレの【ダムドビート】も苦しめられたもんだ。え、勝敗？訊くな。

「勇者さまは邪神によって混沌としたこの世界を再び一つに纏め上げ、邪神を討ち滅ぼし、平和を齎してくださったのじゃ。」

「邪神ねえ……。」

勇者さまも大変だったんだねえ。オレは邪神とやらと戦う気なんぞまったく起きないな。まあ、もう討ち滅ぼされたってんなら、もう関係ないし。

「で、その勇者さまとやらも、このデュエルディスクを装置していたと。」

「うむ、そうじゃ。」

左腕を上段に構え、《執念深き老魔術師》にデュエルディスクを翳す。しっかし勇者さまとやらも、よくもまあこんな剣呑なデザインの代物を使ったもんだ。望んだデザインじゃ無いんだろっかね。オ

レは好きだけどね、いじいじの。

「……うし、じゃ、二つ目の質問。「イモータル」って何。」

「うむ。「イモータル」とは、つい最近現れた闇の軍団の名前じゃ。この世界の各地に突如出没し、虐殺と支配の限りを尽くしておるのじゃ。」

「イモータル……不死者か？」

「いや、確かにアンデットもいるが、基本的に表立って動いておるのは悪魔が多いの。」

ふうん……。ほとんど名ばかり、って奴かね。しっかし、ライトノベルとかもそうだが、現実とは事情の違う物事の話は眠くなる話ばかりだな。そっぴや宿とかどうしよう。

「それなら里に空き家が1つ在るからの。そこを使っておくれ。過去に勇者さまがそこを使っておられてから、我々はそこを常に空き家にしておるのじゃ。」

「お。じゃ、お言葉に甘えて。」

あの後、思い出したように、いきなり屋根に穴が開けられたただの、家が散らかったのだとブチブチと愚痴を言われ始めたので、オレは慌ててその場を後にした。流石は《執念深き老魔術師》。勇者さまと崇めておきながらも、しっかりと恨み辛みを吐露するのは忘れな
いつてか。

短い距離だったが、最近には家に引きこもってばかりだったから、久しぶりに全力で走った気がする。学校が関連するもの以外で最後に走ったのはいつだったか。確か中学二年生の頃、近所のカードシヨップで開催された遊戯王の大会に遅刻しそうになって走った時だったっけな。

しかし、やはり突然運動をするのは良くないな、うん。もう息が切れかけてる。体力を失って重くなった体に鞭打ち、同じく重くなった脚を引き摺って場所を教えられた空き家へと向かう。

なんとなく振り返れば、木々の向こうで沈んでいく太陽の陽光が残照となって樹林の輪郭を優しく照らしていた。

「やっぱり異世界にも太陽は有るのか。」

そう、オレはもうこの世界が異世界の類であることを《執念深き老魔術師》の話の内で察していた。敢えて厳密に言つと、《次元の裂け目》の辺りか。

自分は今異世界、つまり非日常の世界で独りになったというのに、直ぐに許容できているオレ自身に驚かされる。これも常に二次元世界へのトリップを願っていた賜物か。そこ、笑うな。オレは真剣だぞ。中学時代から今年に掛けて、元旦の初詣では悉くトリップを願っていたほどだ。一途だろ？

「（……て、オレは何を電波な事を。）」

1人で電波乙的な事をやっていた自分に苦笑して、再び空き家への道を進んでいく。

空き家までの時間はそこまで掛からなかった。沈む夕日を眺めてから歩いて数十秒も経っていない場所に、空き家は静かに佇んでいた。

勇者さまとやらが使っていたというから、少しばかりゴージャスな物を想像していたが、だがしかし、そうは問屋が卸さない。現実には常に厳しいのである。長老や通り過ぎた他の家屋と寸分変わらない藁葺きの一軒家(?)に、思わず肩を落とす。

いやいや待てオレ。タダで宿を提供してくれたんだ。それだけでも感謝せねば。その上に、このあと里を挙げて勇者さまの祝賀パーティーをささやかながら開いてくれるという。うんうん、良い人達だ。勇者さまさまというべきか。

パーティーにも心躍るが、取り敢えず今は睡眠を取らねば。色々とありすぎて心身共に気だるくて眠い。

容赦なく襲い掛かる眠気と格闘しつつ、空き家の木製のドアを開けて中に滑り込む。

「…………おお。」

入ってみればなんとまあ。この空き家、外見は寂寥感を漂わせるが、室内はそれほど悪くない。狭いのはまあ仕方ないとして、掃除や手入れが各所に行き届いている。勇者さまとやらが使ってから、聖域のような扱いでも受けてたんだろっか。

備え付けのベッドにダイブイン。ギシリと軋み、シーツが乱れるが、そんな事は気にしない。だって眠いんだもの。

瞼をゆっくりと閉じ、夢の世界へと旅立とうとするオレの脳裏に、ふと1つの問題が浮上した。

「《次元の裂け目》が無くなったが、還る時どうすんだ…
…。」

それは困る。明日はニコ動に“超電磁砲”の最新話がアップされるのだが。困るポイントは“本来なら”そこでは無いんだろうけど、生憎オレは楽観主義者。困るのは自分の趣味が阻害される事。

……まあ良いや。取り敢えず今は寝よう。考えるのはその後でも遅くないだろうし。婆さんに訊いてみ、て……

そのままオレは睡魔に誘われるように意識の泥中へと沈んでいった……。

魔法族の里（後書き）

私も行きたいです、異世界。（切実）

……毎回毎回グダグダな展開ですみません。（泣）

次回は漸くデュエルが勃発します！……おそらく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n03771/>

遊戯王 - 異世界黙示録 -

2010年10月9日07時03分発行